

## ブルガリア・フォークロアにおける 「聖ゲオルギオスの竜退治」の変容

—— キリスト教伝説と民間暦 —— (II)

伊 東 一 郎

(承前)

### 6. 儀礼歌における竜退治の聖ゲオルギオス

4月23日に定められている聖ゲオルギオス祭はブルガリアにおける農耕と牧畜の民間暦において新年ともいうべき意義を持っている。ブルガリアではこの日に実質的に農作業が開始され、特別な儀礼用のパンを焼く。またブルガリアではかつては大規模な羊飼養を生業とするものは、夏期に羊群を高地山岳地域に移動させ、冬期には麓に降りてきていた。そしてブルガリアでは聖ゲオルギオス祭は伝統的に羊飼いが羊群を冬営地から夏営地へ移動させる出発の日であった。このために聖ゲオルギオスはしばしば農耕と牧畜の守護者として表象されている。

しかし民間の儀礼歌においてはそれに加えて竜退治によって旱魃から水を解放する聖ゲオルギオスのイメージも同時に描き出されているのである。ドミータル・マリノフは次の歌をクリスマス・イブに歌われるコレダの歌として南東ブルガリア、ブルガス地方のヴレソヴォ村で採集したが、インフォーマントの老婆はこの歌はかつては聖ゲオルギオス祭の儀礼歌として歌われたものだったと証言したという [Маринов 1981: 596]。これも上述の神話的バラードと同様、収穫を保証する聖ゲオルギオスのイメージが収穫の予祝を本質とするコレダの本質に一致したからであろう。

Тръгнал ми е цветен Гьорги	美丈夫ゲオルギは出発し
Да обиди нивен сънор,	畑の畔を見て回った
На път среща сура ламя,	その途中で灰色の竜に出会った
Триоглава, шестокрила,	三つの頭を持ち六つの翼を持つ竜に
Път му пречи, ход не дава,	竜はゲオルギの道を塞ぎ
Затворила шест планини,	六つの山を閉ざし
Заклучила шест извора,	六つの泉を止めた
Та не дава капка вода.	一滴の水をも与えなかった
Извади си цветен Гьорги,	美丈夫ゲオルギは抜き放った

Извади си остра сабля,  
Та замахна и отсече,  
Та отсече до три глави.  
Та бликнали, та потекли,  
Та потекли до три реки:  
Първа река жълто жито,  
Друга река ройно вино,  
Трета река мед и масло.  
Първа река по орачи,  
Втора река по копачи,  
Трета река по пчелари,  
По пчелари по овчари.

鋭い剣を抜き放った  
剣を振り上げると切り落とした  
三つの頭を切り落とした  
すると湧き出し、流れ出した  
三つの川が流れだした—  
最初の川は黄色い小麦の川  
二番目の川は赤葡萄酒の川  
三番目の川は蜜とバターの川  
最初の川は農夫のため  
二番目の川は葡萄作りのため  
三番目の川は養蜂家のため  
養蜂家と羊飼いのため

[マリノフ 1981: 596]

ここでは旅立とうとする聖ゲオルギオスの前に水を堰き止めていた三つの頭を持つ竜が現われ<sup>(1)</sup>、聖ゲオルギオスがそれを切り殺すと、その三つの首から三つの川が流れだすという内容で、その三つは農作物である小麦と葡萄、養蜂と牧畜の産物である蜜とバターの川だったというものである。次のヴァリエーションは、ベッソーノフがF. I. シシコフの収集したテキストによるものとして紹介しているものである<sup>(2)</sup>。

Тръгнъл ми е свети Георги  
Сутрин рано на Гергиовден,  
Да обходи зелен синор,  
Сутрин рано на Гергиовден,  
Зелен синор башъ пшеница.  
На срешта му сура ламя,  
Сура ламя със три глави.  
Свети Георги отоговаря:  
«Ой ти тебе, сура ламио!  
Назад, назад, сура ламьо!  
Че ще извадя злат буздуган,  
Ще отсека ли три глави,  
Та ще текнат до три реки,

聖ゲオルギは出発し  
ゲオルギの日の朝早く  
緑の畔を見て回った  
ゲオルギの日の朝早く  
他ならぬ小麦畑の畔を  
その行く手に現れたは灰色の龍  
三つの頭を持つ灰色の龍だ。  
聖ゲオルギが言うことには—  
「おお汝灰色の龍よ！  
下がれ、退け、灰色の龍よ！  
私は金の棍棒を抜き放ち  
おまえの三つの頭を切落そう  
さすれば三つの川が流れだそう

До три реки чърни кръви!»	黒い血の三つの川が！」
Не се върна сура ламя.	灰色の龍は引き返さなかった。
Той извади злат буздуган,	聖ゲオルギオスは金の棍棒を抜き放ち
Та отсече до три глави.	三つの頭を切り落とした。
Текнали се до три реки,	すると三つの川が流れだした、
До три реки чърни кръви:	黒い血の三つの川が—
Първа река по орачи—	最初の川は農夫のため、
Башь пшеница;	ほかならぬ小麦の川だ
Втора река по овчари—	二番目の川は羊飼いのため、
Пресно млеко;	搾りたての牛乳の川だ
Трета река по копачи—	三番目の川は葡萄作りのため、
Ройно вино.	赤葡萄酒の川だ。
Стани сега, господине!	さあもう起きなさい、家のご主人
Тебе пеем, Бога славим,	あなたに歌おう、神を讃えよう
От Бога ти много здраве,	神があなたに多くの健康を送ってくれるように、
От дружина със веселба!	仲間たちから心楽しく祝われるように

[Бессонов 1862: No.116]

この儀礼歌では龍は「水を堰き止め」てはいないが、マリノフの採集した儀礼歌と同じように三つの頭を持つ龍が立ちはだかり、その頭を切り落とすと、同じように三つの川が流れ出す。しかし流れ出す川は「水」のメトニミイと考えられる。ちなみに歌詞の最後はおそらく門付けをした家の主人への呼びかけで、この儀礼歌もおそらくコレダとして歌われたものであろう。

歌われている三つの川に流れるものは小麦、牛乳と葡萄酒で、マリノフが採集した儀礼歌に歌われる小麦、葡萄酒、蜜とバターと若干の違いがあるが、いずれもブルガリアの農耕・牧畜の重要な産物であることに変わりはない。

聖ゲオルギオスはこれらの儀礼歌でも竜を退治することによって水や川を解放し、豊穰を保証する存在として描かれている。ここには4月23日という日付の機能によって農耕と牧畜を同時に守護し、その暦を開始させるために不可欠な水の授与者として表象される聖ゲオルギオスの姿があるのである。

## 7. 結 論

こうして聖ゲオルギオスの竜退治に関するブルガリアの歌謡フォークロアを、その基となったキリスト教伝説と、4月23日に定められたブルガリア最大の春の祭りである聖ゲオルギオス祭の

農耕・牧畜儀礼、またそれにまつわる俗信との関連によって分析してきた。そのことによって明らかになったのは、ブルガリアの聖ゲオルギオスの竜退治伝説における聖ゲオルギオスのイメージが、その祝日の日付けの農耕・牧畜民にとっての意味によって影響を受け、大きな変容を遂げていることである。その変容は祝祭からのメトニミックな連想と、竜と水とを結び付ける神話学的メタフォアの二つの系列によって導かれていた。このことは、このモチーフを含んだブルガリア民謡がロシアの巡礼霊歌のような叙事詩としてではなく、聖ゲオルギオス祭やクリスマスなどの重要な民衆の祝祭にホロの歌あるいはクリスマス・キャロルであるコレダとして歌われていること重要な関連がある。

一般的に、ヨーロッパにおける民俗儀礼は、しばしば単にキリスト教の祝日と異教の祭りの習合したもの（二重信仰）として歴史的に説明されてきた。例えば聖ゲオルギオス祭を、起源的にスラヴ異教時代の春の神ヤリーロの祭と結びつける視点がロシアの、古くはアフナーシェフ、最近ではイワーノフ、トポロフの神話論 [Иванов и Топоров 1974]、それを受け継いだクロアチアのヴィトミール・ベライの神話論 [Belaj 2007] に見出される。しかし歴史的な前後関係の指摘はそれだけでは両者の理論的な因果関係の説明とは言えず、我々はまず当該の祭りの日付が生業の一年の流れにおいて持つ機能的意味を考える必要がある。何故なら当該の祭りの不変の意味、すなわちその構造的核は、この機能的意味だからである。既に見て来たように、ブルガリアにおける竜退治の聖ゲオルギオスのフォークロアにおける多様なイメージは、前キリスト教的な異教の影響と言うよりは、この構造的意味によって引き起こされたものであった。そもそもヤリーロの信仰はブルガリアには知られていない。

最後に付け加えておけば、個々のスラヴ民族の農耕・牧畜暦の構造は、当然のことながら、その民族のおかれている地理的条件によって規定され、たとえば4月23日という日付の機能的意味も同一ではない。この日の儀礼において北の平原地帯である東西スラヴと山岳地帯である南スラヴとの間に明瞭な違いが生まれているのはこのためと考えられる。

聖ゲオルギオスの竜退治の叙事歌謡を比較する時、南スラヴにおいて竜が水の占有者として現われるのに対して、東スラヴにおいて竜は水の占有者としては現れていない<sup>(3)</sup>。これはこの叙事歌謡における聖ゲオルギオスの変容のありかたが、それぞれの民族における聖ゲオルギオス祭の機能によって影響を受けていることを明確に示しているのである<sup>(4)</sup>。

#### 注

- (1) 聖者伝における竜には翼や頭を複数持っているという描写はない。これはフォークロア由来の竜のイメージであろう。因みにロシアの巡礼霊歌「聖ゲオルギオスの竜退治」には9つの頭を持つ竜が登場する [伊東 2013a；伊東 2013b；伊東 2014]。
- (2) バッソノフの収録したブルガリア語テキストの表記は旧正法によっているが、ここでは現代ブルガリア語の正書法によって書き直した。

- (3) 東スラヴと南スラヴの竜退治をモチーフとした叙事歌謡を比較したブチーロフの論考はこの点に触れていない。またここでブチーロフ [Путилов 1968] はロシアの巡礼霊歌における聖ゲオルギオスの竜退治のモチーフにも触れていない。
- (4) 本文でも述べたようにブルガリアおよびバルカン一般の牧畜民間暦において、聖ゲオルギオス祭は冬営地から夏営地への羊群の移動の開始日とみなされている。この羊飼いの新年ともいべき機能を持つ聖ゲオルギオス祭の影響によってブルガリア民謡ではしばしば聖ゲオルギオスが羊飼いとして表象されるが、これについては、[伊東 1988] を参照。そこでは牧畜民間暦におけるブルガリアの聖ゲオルギオス祭が、機能的にユダヤの「過ぎ越し」の祭りに対応するものであることが指摘されている。この着想は谷泰の『「聖書」世界の構成論理』[谷 1984] に多くを負っている。
- (5) 以下の文献表は本稿 (I) と (II) [伊東 2015] 共通のものである。(I) の末尾にも文献表を付したが、本稿に付したものを正とする。

#### 文献

- Антиќ, Вера 1976: Хагиографијата за св. Ѓорѓи и мегданот од ламјата. — Антиќ, Вера. Од средновековната книжевност. Скопје: Македонска книга, 128-147.
- Арнаудов, Михаил 1971: Студии върху българските обреди и легенди. 1. София: Издателство на Българската академия на науките.
- Бессонов, Петр 1862: Калеки переходные: Сборник стихов и исследование П. Бессонова. Вып.2. Москва: Типография А.Семена.
- Живков, Тодор (отг.ред.) 1993: Български народни балади и песни с митически и легендарни мотиви (Сборник за народни умотворения и народопис. Книга LX. Част 1.) София: Издателство на Българската академия на науките.
- Иванов, Вячеслав 1980: Змей. — Токарев, Сергей (гл.ред.) Мифы народов мира. I. Москва: Изд. «Советская энциклопедия». 468-471.
- Иванов, Вячеслав и Топоров, Владимир 1974: Исследования в области славянских древностей. Москва: Издательство «Наука»
- Ито, Ичиро 1987: Преображение Святого Георгия в болгарском народном сознании. Втори Международен конгрес по българистика. Доклади. Т.10. Етнография. София: Издателство на Българската академия на науките, 31-36.
- Колева, Татяна 1981: Гергьовден у южните славяни, София: Издателство на Българската академия на науките.
- Маринов, Димитър 1981. (1914): Народна вяра и религиозни народни обичаи. София: Издателство «Наука и изкуство»
- Миладинови, Димитър и Константин 1861: Български народни песни. Загреб: Книгопечатница на А. Ягича. (переиздание: 1961 София: Български писател)
- Миладиновци, Димитрија и Константин 1983: Сборник на народни песни. Скопје: Македонска книга.
- Прашков, Любен 1985: Български икони. София: Държавно издателство «Септември».
- Пропп, Владимир 1946: Исторические корни волшебной сказки. Ленинград: Издательство Ленинградского университета.
- ブロップ、ウラジーミル 1983: 『魔法昔話の起源』 齊藤君子訳 せりか書房
- Пропп, Владимир 1973: Змеборство в свете фольклора. — Путилов, Б., Чистов, К. (отв.ред.) Фольклор и этнография русского Севера. Ленинград: Издательство «Наука». Ленинградское отделение, 190-208.
- Путилов, Борис 1968: Русские и южнославянские песни о змеборстве. — Русский фольклор. XI, 31-54.
- Стойкова, Ана 2012: Аджарска следа в чудото на Св. Георги със змея? — Мирјана Детелић, Лидија Делић (уредн.) Гује и јакепи. Книжевност, култура. Београд: Балканолошки институт Српске академије наука и уметности, 255-267.
- Belaj, Vitomir 2007: Hod kroz godinu. Pokušaj rekonstrukcije prahrvatskoga mitskoga svjetonazora. 2. Izmijenjeno i dopunjeno izdanije. Zagreb: Golden marketing-Tehnička knjiga.

- Brata Miladinovi 1984: Ljudske pesmi v slovensem prevodu Štefana Kociančiča. Ljubljana: Goriški muzej Nova Gorica. Народен музеј Српска. Univerza Kardelja v Ljubljani. Znanstveni inštitut Filozofske fakultete.
- Ito, Ichiro 1987: Transformation of St. George in folk consciousness: from field interview in a Bulgarian village of Novakovo. — Tani, Y. and Sakamoto, S. (ed.) Domesticated Plants and Animals of the Southwest Eurasian Agro-Pastoral Culture Complex. II. Pastoralism. Kyoto: The Research Institute for Humanistic Studies, Kyoto University, 69-82.
- ヤコブス・デ・ヴォラギネ 1984: 『黄金伝説』 2. 前田敬作・山口裕訳 人文書院 (Jakobus de Voragine, „Legenda Aurea“)
- Widengren, Geo 1965: Die Religionen Irans. Stuttgart: W. Kohlhammer Verlag.
- 伊東一郎 1981: 「バルカンにおける降雨儀礼と儀礼歌—ドドラあるいはベベルダー—」『季刊人類学』12巻2号、59-103.
- 伊東一郎 1984: 「ブルガリアのバステルナーク」『えうみ』13号、1-10.
- 伊東一郎 1988: 「聖ゲオルギウスの変容—ブルガリアの伝承と儀礼より」青木保・黒田悦子編『儀礼—文化と形式的行動』東京大学出版会、214-236.
- 伊東一郎 1994: 「スラヴ民衆文化における聖ゲオルギウス—イコン・儀礼・フォークロア」聖心女子大学キリスト教研究所編『東欧・ロシア—文明の回廊』春秋社、97-113.
- 伊東一郎 2013a: 「ロシアにおける「聖ゲオルギオスの竜退治」伝説—巡礼霊歌・イコン・聖者伝 (I)」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』58輯第2分冊、91-105.
- 伊東一郎 2013b: 「巡礼霊歌からイコンへ—ロシアにおける「聖ゲオルギオスと竜」伝説—」伊東一郎・蔵持不三也・松平俊久『ヨーロッパ民衆文化の想像力—民話・叙事詩・祝祭・造形表現』言叢社、29-77.
- 伊東一郎 2014: 「ロシアにおける「聖ゲオルギオスの竜退治」伝説—巡礼霊歌・イコン・聖者伝 (II)」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』59輯第2分冊、71-84.
- 伊東一郎 2015: 「ブルガリア・フォークロアにおける「聖ゲオルギオスの竜退治」の変容—キリスト教伝説と民間暦— (I)」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』61輯 第2分冊、73-86.
- 栗原成郎 1996: 「狼の牧者—異教神ヤリーロから聖ゲオルギイへ—」(栗原成郎『ロシア民俗夜話 忘れられた古き神々を求めて』丸善 丸善ライブラリー700、93-137.
- 谷泰 1984: 『「聖書」世界の構成論理』岩波書店